

研究・調査報告書

報告書番号	担当
199	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名 (原題/訳)	
The remarkably high prevalence of epilepsy and seizure history in fetal alcohol spectrum disorders. (胎児性アルコールスペクトラム障害では、てんかんと痙攣の有病率が著しく高い)	
執筆者	
Bell SH, Stade B, Reynolds JN, Rasmussen C, Andrew G, Hwang PA, Carlen PL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Clin Exp Res. 34(6): 1084-1089 (2010)	
キーワード	
胎児性アルコールスペクトラム障害、てんかん、痙攣	
要旨	
背景： 胎児性アルコールスペクトラム障害 (FASD) は妊娠期間中にアルコールを摂取した母親から出産した子供で結果として生じる発達障害について包括的に表す概念である。FASD にはてんかんなどのいくつかの病気が併存している。本研究は、FASD 患者を対象として、てんかんの有病率や痙攣発作の病歴について評価することと、それらの疾患の危険因子について検討した。	
方法： 2つの FASD 病院で有効な診療記録 (N=1063) について、後向き、記録調査を行った。診断が確定できない被験者を除いた後、総数で 425 人 (年齢 2-49 歳) が分析の対象となった。FASD の診断とてんかんや痙攣性疾患の併存に対して危険因子と考えられる他の要因 (例えば、アルコール曝露の程度、他の薬物、出生の種類、心的外傷) との間の相関について χ^2 、多変量多項目ロジスティック回帰分析で解析した。	
結果： 研究対象者のうち、25 人 (5.9%) はてんかんと診断された。50 人 (11.8%) は少なくとも記録上 1 回の痙攣発作があり、両方で 17.7%の有病率が得られた。重要なことは、アルコールに関連した疾患のサブグループ (FASD、部分 FASD、アルコール関連神経発達障害) で、てんかんや痙攣発作の有病率に差がないことである。母親の飲酒歴から、妊娠第一期あるいは妊娠三半期を通じて飲酒していた場合に、子供のてんかんの有病率あるいは痙攣発作が多かった。てんかんと痙攣で観察された高い有病率に、他の危険因子は関連していなかった。	
結論： FASD 患者ではてんかんや痙攣の有病率が著しく上昇する。妊娠期の母親のアルコール摂取はこのような疾患の発症危険性を上昇する。	